〔萬葉集十一古今相聞往來歌類〕正述心緒

狛錦紐解開夕谷（コマニシキヒモトキアケテユフベダニ）（谷原作戸、シラザルイノチコヒツカアラム）（略解説改）不知有命戀有、

〔古今和歌集十九雜體〕題しらず　讀人しらず

すみぞめのゆふべになれば、ひとりゐて、あはれ〳〵と、なげきあまり、せんすべなみに、（略下）

〔書言字考節用集二時候〕昏（クレ活法、日暮也）　暮（同）　晩（同）

〔萬葉集抄三〕日のくるゝを、くるとも、くれともいふは、くろくなる詞也、

〔東雅一天文〕暮クレ（略中）　暮、クレといふは、クレは暗（クラ）なり、天昏く暗きをいふ也、

〔日本書紀二十九天武〕十三年十一月戊辰、昏（イヌ）時七星俱流東北則隕之、

〔萬葉集十雜歌〕詠月

朝霞（アサガスミ）春日（ハルヒノ）之晩者（クレハ）、從（コヨリ）木間（ウツ）、移（ロフ）歴（ツキヒ）月乎（ツキヲ）、何時（イツトカ）將待（マタム）、

〔伊呂波字類抄由天象〕晩頭（ユフクレ）　薄暮

〔書言字考節用集二時候〕黄昏（ユフクレ）　迫（同）晩（又作薄晩）　薄暮（同文選）　夕曛（同上）同　曛黄（同遊仙窟）

〔倭訓栞中編二十七〕ゆふぐれ　夕暮は殊に秋を賞するは、物さびしきをもてなり、よて歌にも三夕の稱を得たり、

〔古今和歌集八離別〕人の花山にまうできて、夕さりつかたかへりなんとしける時によめる、

僧正遍昭

夕暮のまがきは山とみえななむよるはこえじとやどりとるべく

〔枕草子一〕秋は夕ぐれ、夕日はなやかにさして、山ぎはいとちかくなりたるに、烏のねどころへゆくとて、みつよつふたつなど、とびゆくさへあはれなり、まして鴈などのつらねたるが、いとちいさくみゆるいとおかし、日いりはて、風のをと、虫のねなど、いとあはれなり、